

ヒューム『人性論』分析：「存在」について

2020年7月20日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

※ 引用される場合は、出典を明記して
くださるようお願いいたします。

本稿は、ヒューム著、土岐邦夫・小西嘉四郎訳『人性論』（中央公論社）における「存在」に関する分析である。

存在に関しては、「*存在の観念は、存在しているとわれわれが思いだくものの観念とまさしく同じもの*」というヒュームの言葉が既にその解答になっているように思える。存在の有無（に対する信念）は究極的には知覚の有無にたどり着く。

しかし、存在の信念の「原因」を問う過程でヒュームは思考の袋小路に入ってしまったように思える。結局のところヒューム自身が言うように、いろいろ哲学者が論証を試みたところで、私たちはその論拠ゆえに存在を確信していると言い切れるわけではないのだ。

本文中で詳細に説明するが、以下の三つの論点が特に重要であるように思える。

- ① 因果推論に知覚の恒常的相伴（習慣）は必ずしも必要ではない。因果推論に「基本原則」など必要ない。ヒュームは因果推論ができるようになる「原因」と、因果推論の客観的正しさの根拠づけとを混同してしまっている。この混同が、存在の信念についての説明を混乱させている。
- ② 因果関係や存在に対する信念の“原因”を一元的に説明することはできない。「知性」とか「理性」とか「習慣」とか「想像」とかいう概念で一元的に説明されるわけではない。
- ③ 同一性・恒常性は、差異・変化と同じく知覚経験として現れるものであって、どちらかだけを懐疑するのはおかしい。

・・・上記論点に関して、ヒューム因果論の問題点については、

ヒューム『人性論』分析：「関係」について

http://miya.aki.gs/miya/miya_report21.pdf

③の問題については、

ヒューム『人性論』分析：「同一性」について

http://miya.aki.gs/miya/miya_report29.pdf

・・・で既に説明しているのので、参考にしていただければ幸いです。

なお、本稿における引用部分は、すべて上記『人性論』（中央公論社）からのものである。

<目次> ※ () 内はページ

I. 存在の観念は、存在しているとわれわれが思いいだくものの観念とまさしく同じもの (2 ページ)

II. 「原因」を問うても究極・単一の答えは出てこない (6 ページ)

- (1) 「物体があるのかないのか」ではなく「物体があると思っている」という事実の明証性
- (2) 原因を問うても様々な答えが可能である
- (3) 知覚は感覚機能ではない
- (4) 知覚経験の分類は想像によるものではない
- (5) 原因を知らなくても存在していると思っている

III. 「原理」ではなく個別的な因果的知識の集積 (12 ページ)

- (1) 「整合性」は過去の経験に基づく因果的知識
- (2) 因果推論に恒常的相伴は必ずしも必要ではない

I. 存在の観念は、存在しているとわれわれが思いいだくものの観念とまさしく同じもの

どんな種類の印象あるいは観念でも、われわれがともかくそれを意識し、あるいは記憶しているかぎり、存在するものとして思い抱かれたいようなものはない。そして、明らかにこの意識に存在の最も完全な観念と確信とが起因するのである。(ヒューム、36 ページ)

・・・というヒュームの説明は、重要な指摘を含んでいる一方、混同を招く恐れもある。たとえば痛みや胸の苦しさは印象であるし「事実」ではある。しかし「存在物」ではない。

あるいは実在しないキャラクターや動物があたかも存在するかのように想像する・思い抱く（観念）場合もありうる。（想像物を絵に描いたものは「絵画」としては印象であるが、想像物としては観念であるとも言える？）

そこで、単一の知覚経験が（俗な言い方をすれば）私の意識に現れている感覚と私の外に存在している物という二つの見方を、いかにしてもたらすのか、という問いは生まれて来よう（ジェイムズのように）。あるいは、ある知覚経験は私の内側のみで生じている感覚であると判断され、別の知覚経験は私の意識のみでなくそこに実物として存在しているものであると判断される、その区別の根拠は何か、という問いも生じて来よう。

もっともヒュームの議論を見る限り、ヒュームは思考の中であれ、実際の具体的出来事であれ、「存在している」「そこにある」という判断、それはいかなることなのか、そこを説明しようとしているようである。

そして、ここで最も重要なのは、「存在しているもの」を見ているとき、それはあくまで「存在しているもの」として見ているのであるし、「存在しているもの」を想像しているのであれば、それはあくまで「存在しているもの」として想像しているのである。

私たちには、目の前のものが（特に目が疲れていないかぎり）普通に立体的に見えているはずである。以前、拙著「『これが現象学だ』検証」（URL: <http://miya.aki.gs/miya/genshogaku3.pdf>）で説明したことがあるのだが、たとえば立方体はあくまで立方体として知覚しているのであって、平面的な菱形や長方形の組み合わせとして認識しているのではない。それらの要素（菱形や長方形）はあくまでその立方体を改めて分析した上で見いだされていくものなのである。

そこにあるリンゴは立体的に見えているし、そこにある椅子や机も立体的に見えている、その端的な経験は論拠により立証されるのではなく、所与の経験としてそう見えているのである。

存在の観念は、存在しているとわれわれが思いいだくものの観念とまさしく同じものである。なにかをただ反省するのと、それを存在するものとして反省するのとは少しも違わないのである。存在の観念は、なにかある対象の観念と結びつけられても、この観念になにも付け加えはしない。われわれが思いいだくものはすべて、存在するものとして思い抱くのである。われわれが好きなようにどんな観念を作ろうと、それは存在の観念であり、存在の観念はわれわれが好きなように作るどんな観念でもある。（ヒューム、36～37 ページ）

・・・存在していると思ひ抱く観念（心像・イメージ）はあくまで存在物としての観念であって、その観念＝存在物なのである。これは観念ではなく印象であっても事情は同じである。存在していると思ひながら見ている物（印象として）において、印象＝存在物なのである。具体的に言えば、

そこに見えているもの＝リンゴ＝存在物

そして、「存在」「存在物」というものを具体的印象（観念でも良いのだが）として説明する（指し示す）ということは、

そこにあるリンゴ＝存在物、そこにある机＝存在物、そこにある山＝存在物・・・

というふうに、ただ具体的事例（印象）として指し示していくしかない。それが「存在」「存在物」の“意味”なのである。このあたりはヒュームの抽象観念の説明を参考にしていただければと思う。言葉の意味とは、具体的印象や具体的観念としてしか現れないのである。

結論から言えば、そこに見えているもの＝存在物、見えるということが存在している、非常に単純なのである。そして「存在」の意味を示そうとすれば、そこに見えているリンゴを指し示すこと、そこに見えている椅子や机を指し示すことに他ならない、「存在」という“抽象観念”の意味は、具体的・個別的な知覚経験によってその都度示されるものなのである。

あるいは視覚以外であっても、触感やらの知覚的経験がまさに存在そのものなのである。

つまり、これら**具体的・個別的知覚経験から離れて「存在そのもの」というイメージを抽出しようとしても無理なのだ。具体的事物（具体的知覚経験）から離れた「存在そのもの」というものをいくら探しても見つかることはない。**

その上で、私たちが錯覚する場合、どのような根拠により錯覚であると言えるのか、そういった議論が可能となるのだが・・・

われわれの知覚が真なのか偽なのか、つまり、知覚が正しく自然を表現しているのか、それとも感覚機能の錯覚なのか、ということについては、知覚の整合性から推論を導き出されるであろう。（ヒューム、51 ページ）

・・・ここで間違っていないのだが、厳密に言えば知覚経験（印象・観念）そのものを“真”とか“偽”とか判断することはできない、というかしようがない。ただ見えたものは見えたものなのであり、それが間違いとか正しいとか言いようがない、ということなのだ。真偽を問えるのは、その知覚経験に対し「リンゴだ」と言語判断した事実、「そこにリンゴが在る」と言語判断した事実なのである。

つまり、知覚経験そのものの真偽は問えないが、知覚の対象が本当に存在しているかどうかの判断は疑いえる、ということなのである。

ならば知覚対象＝存在物と断定できないのでは、という意見が出てくるかもしれない。存在しているかどうかの基準は、錯覚なのか錯覚でないのかを見極める「論理」「論拠」ではないかと考える人がいるかもしれない。

それらの論理とは具体的に言えば、遠くにあるものは近くにあるものよりも見間違いやすいとか、近年は立体映像の技術が高まり場合によっては本物と見分けがつかない場合もありうるとか、その他人間が錯覚しやすい条件についてとか、そういった個別的な因果的知識のこと、あるいは（後述するが、ヒュームの言うような）物の存在の恒常性や整合性を根拠づけるような因果的知識のことでもある。

ではこれらの知覚に関する因果的知識が存在の根拠、あるいは（ヒュームの表現を借りれば）存在の観念をもたらす“原因”なのか、と問われれば、そういうわけでもない。

例えば、ある物を遠くから見て「何か動物がいる」と思ったとする。その時はその見えたもの＝動物なのである。しかし、さらに近づいてそのものを見たら単なる木の切り株だった、と気づく。するとその見えたもの＝木の切り株、と真理が更新される。その経験から遠くから見ると錯覚することがあるのだ、という経験則が導かれるであろう。

ここで間違えてはならないのは、真理が更新されたとしても、やはり知覚経験＝存在物であることに変わりはなく、それらの事実から事後的に経験則（因果的知識）が導かれるということなのだ。

また、立体映像の映写機（他の正式名称があるかもしれないが）のことを知らなければ、その映像を見て普通の存在物であると思込むであろう。つまり私にとってその知覚＝存在物なのである。立体映像の知識を知って初めて、錯覚することがありうるという知識がもたらされる。

私たちが錯覚を起こしうるという経験則を既に知っているとしても、その知覚経験（とそれが存在しているという信念・確信）が本当に錯覚なのかどうか、それはやはりもう一度近づいてよく見てみるとか、触ってみるとかして確かめざるをえない。それが本当に立体映像か確かめようと思えば、実際にそれを触れてみる（結果触れることができない）とか、具体的経験で検証するしかない。少し離れたところに何かあるように見えたが、疑わしい場合、そこに近づいて本当にあるのかどうか実際に見て確かめるしかない。そこに何も見えなければ何も存在していないという結論になるだろうし、実際に何か見えれば存在しているという結論になると思われる。

結局、存在の有無は知覚経験の有無にたどり着くのである。

II. 「原因」を問うても究極・単一の答えは出てこない

(1) 「物体があるのかないのか」ではなく「物体があると思っている」という事実の明証性

いかなる原因がわれわれに物体の存在を信じさせるようにするのか、と問うのはかまわないが、しかし、物体があるのかないのか、と問うのは無益なことである。これはあらゆる推論で認めてかからねばならぬ点なのである。(ヒューム、93 ページ)

そこで、この節の研究の主題は、われわれに物体の存在を信じさせるようにする原因についてである。(ヒューム、93 ページ)

・・・言葉尻をとらえて批判するような感じにとられては困るのだが・・・ここで“無益”かどうかは基準にはなりえない。そもそも“無益”とはどういうことなのか？ 無益というのであれば原因を問うことだって無益なことがある。

また、個別的経験として考えてみれば、そこに本当に物体があるのかどうか、それを問うこともできる。例えば錯覚ではないかとか、現代においては実物ではなく立体映像ではないのかとか、自らの判断を疑うことはできる。そして実際に私たちは知らずに偽の映像を見せられていたり、錯覚していたりする可能性もあるのだ。

その上で、(問うこと自体が“無益”というよりも)事実として疑いようのないことは、「物体がそこにある」と思った、思っている事実、「物体がある」と思っている事実が具体的経験として現れている、その明証性のことなのである。

(2) 原因を問うても様々な答えが可能である

ヒュームは、「われわれに物体の存在を信じさせるようにする原因について」(ヒューム、93 ページ)、「二つの問題」(ヒューム、93 ページ)を挙げている。

対象が感覚機能に現れていないときでも、その対象に「持続的な」存在を帰属させるのはなぜか、ということと、対象が心や知覚とは「別個に」存在するとわれわれが思うのはなぜか、ということである。(ヒューム、93～94 ページ)

・・・対象物を見る私、そしてそれらの存在物が私の有無とは関係なく存在しているという確信、存在に対する信念・確信はそういった事柄への信念・確信でもある。それに

ついて異論はない。

ただその確信の「原因」を問うたところで、いろいろな説明が可能であろう。

例えば香りがするものは、目をつぶっていても香りがしている。

音を発している物体があれば、目をつぶっても音を発している。

目をつぶっても、手を伸ばせばそれに触れることができる。

・・・その他、因果関係を根拠に、様々な事例を挙げることができるであろう。物体の持続的存在の説明は一元的になされるものではなく、その時その時において、様々な根拠づけができるのである。

ヒュームは場所の関係について次のように述べている。

対象がともに感覚機能に現れていて、同時に関係もそこに示されているときには、これを推論と呼ぶよりはむしろ知覚と呼ぶ。この場合には、思考は少しも働かず、もっと正しく言うと、いかなる能動的な作用もなく、ただ感覚器官を通じて印象を受動的に受け容れるだけである。したがって、この考え方によると、同一、および時間や場所の関係についてどんな観察をしようと、これを推論として受け取ってはならないのである。(ヒューム、42 ページ)

・・・つまり、場所の関係（つまり空間的位置関係）は知覚経験（印象）としてただ現れる、それを受け入れるだけであって、そこに「作用」というものの介在などない、ということなのだ。実際、そこにあるリンゴとバナナの位置関係とは、ただそこに見えているものそのものなのである。それは論証したりするものでもないし、推論する必要もない。そこに現れているもの、それこそが位置関係なのである。つまり物と物、人と物の分離というものは、推論など入る余地もなく知覚経験として現れている、ということなのだ。

・・・もちろん話はそれだけではない。誰かがリンゴを見つめている状況を観察していたとする。明らかに私にはその誰かとリンゴとは別個の物として分離して見えている。ただし、それは私と対象との関係ではない。

それでも、私とその誰かとは同じ人間であるし、私がリンゴを見ているときは、別の誰かが見ている時のような状態になっているだろう、と推測することはできよう。私がスポーツ競技をしている状況を写真や映像として撮影してもらえば、道具と私の位置関係、私と対戦相手の位置関係など、他人にはそのように見えているのだ、と理解できるであろう。鏡がものを映す道具だと知っていれば、鏡に映った私とその周辺の事物が別個に存在していることは視覚的に明白になるであろう。

持続的な存在、(私と対象との) 別個の存在というものは、様々な事例において様々な説明が可能である。しかしこれらは皆“後付け”の説明であって、根拠づけにはなるが、私たちが物の存在、私と対照との分離とを確信するに至った唯一の「原因」(あるいは原理) など、確定しようがない。私たちは知らず知らずのうちに物の存在を確信してしまっているのである。そもそも因果分析というものが経験してしまってからなされる事後的作業なのではあるが・・・

(3) 知覚は感覚機能ではない

ヒュームは先に述べた二つの信念・確信をもたらすものが「感覚機能」なのか「理性」なのか「想像」なのか、と問うている。

まず「感覚機能」に関する議論を見ていく。

感覚機能はその印象を別個のもの、つまり独立した外的なものの映像として示すのではないことは明らかである。なぜなら、感覚機能が伝えるのは混じりけのない知覚だけであって、その向こうにあるものについてはけっして少しもほのめかしたりはしないのである。(ヒューム、95 ページ)

・・・確かにそうなのであるが、知覚=存在であるならば、それ以上問う必要があるのだろうか？ 懐疑と言うよりもヒュームの“ブレ”を感じてしまうのである。

「存在している」と端的に受け取っているのである。つまり知覚していることが「存在」なのである。

問題は、ここでヒュームが「感覚⇒私の外部にある存在」という問いかけをわざわざ設けていることなのである。「感覚機能」という言葉にヒュームのブレが見て取れる。ヒューム自身が自覚しているかどうかはわからないが、「(私の) 内側の感覚⇒外側の存在物」という見方が入り込んではいないだろうか？

ヒューム自身が説明している。

印象という言葉で、生き生きとした知覚が心に生み出される仕方を表わすというふうには理解してもらいたくない。知覚そのものだけを表わすというふうに理解してほしい。(ヒューム、17 ページ)

・・・知覚はあくまで単なる知覚経験である。「感覚機能」(=知覚が心に生み出される仕方、あるいは仕組み) ではない。その知覚経験が「存在物」を示すものであれば、それが「存在物」なのである。「感覚から存在がいかに導かれるか」という問いになって

しまうのはミスリーディングなのである（もちろんヒュームは“導かれない”という結論を出してはいるのだが）。

知覚経験は「私」「自我」「自己意識」というものを表してはいない。厳密に言えば、それが「感覚」かどうかさえ、後付けの分類でしかない（とりあえず経験を具体的に説明するためにしばしば「感覚」という言葉を用いざるをえないのであるが、厳密に言えばそういうことになる）。

要するに、「存在」の問題とは、知覚経験の“向こう”を問うものではないのである。

（４）知覚経験の分類は想像によるものではない

憎むこと、愛すること、考えること、感じること、見ること、これらはすべて知覚することにほかならないのである。（ヒューム、37 ページ）

哲学上の意見がどんなものであろうと、色、音、熱さ、冷たさは、感覚機能に現れた限りでは、運動や固性と同じあり方で存在すること、そして、この点について両方の間にわれわれが置く相違は、単なる知覚からは起こらないこと、これは明らかである。また、これも明らかなことであるが、色や音などは、もともと、刃物から起こる苦、火で暖まる快と同等のものであり、両方の間の相違は知覚や理性をもとにしているのではなく、想像をもとにしているのである。そこで、要するに、感覚機能が判定する限りは、知覚はすべてその存在のあり方については同じである、と結論してよかろう。（ヒューム、96～97 ページ）

・・・私たちの五感や情動的感覚など、すべて私たちの経験であることに変わりはない。「知覚はすべてその存在のありかたについては同じである」という見解ももっともであろう。ただ、この時ヒュームが見落としているのは「言葉」という（これも）経験である。

私たちは様々な知覚経験を、視覚（見えるもの）、聴覚（音）、触覚・・・など様々な分類している。様々な知覚がそれぞれの言葉と繋がりあっている。言語も一つの「経験」であって、その「存在のありかたについては同じ」なのである。

上記のヒュームの論理だと、そこに見えているものを「リンゴ」だと判断するのも、そこにあるものを「机」だと判断することも、「想像」ということになってしまわないだろうか？ 特定の知覚経験を「音」と判断することも、「痛み」と判断することも、それぞれ具体的経験であることに変わりはない。

そこで、なぜ、ある知覚経験を「音」と呼ぶのか、ある知覚経験を「痛み」と呼ぶのか・・・知覚経験と言葉との繋がりというものは、究極的に論理で説明できないところ

へ行き着く。そこにあるものを「1つ」、そこにあるものを「2つ」と呼ぶこと、つまり知覚と数字との関係も同様である。私たちは理屈・論拠以前に、それを「音」、それを「机」「1」と呼んでいる。

青とは何か、と聞かれても、実際に青色を指し示すしかない。あるいは自分で青色を思い浮かべるしかない。青色を波長で説明できるかもしれない。しかしその分析には、実際に青色と人々が認める具体的事物があり、それを測定した上で波長との関係が見出せるのである。しかも波長とは何か、と聞かれればやはりそれも具体的な波形を描いたりして示すしかない。言葉の意味に対する説明を細分化・精密化したり厳密な定義を与えたりすることはできる。しかしそれらも究極的には論理で説明不可能な言葉と経験との繋がりへたどり着いてしまうのである。

つまり言葉と知覚経験との繋がり究極的な説明できなさ(そしてその説明できなさにもかかわらず、ある知覚経験と言葉とが繋がっているという疑いえない事実)なのであって、ヒュームの「知覚や理性をもとにしていてのではなく、想像をもとにしていて」という説明は不正確なのだ。私たちは「想像」かどうかは関係なく、それを「青色」と呼び、それを「机」「痛み」と呼んでいる。その言葉の意味はヒューム自身が述べているように「個物の観念」(ヒューム、29ページ)でしかない(さらに言えば、印象として指し示すこともできるのだが)。

言葉の意味、言葉と知覚経験との繋がり、理性や想像というものを“介在”した上で成立しているのではなく、ただただ名辞と個別的具体的知覚経験との繋がりだけなのである。

その繋がりを前提とした上で、様々な因果的検証による根拠づけや論証が可能となっている。順番を間違えてはならない。

(5) 原因を知らなくても存在していると思っている

私たちは知らないうちにも物が存在していると把握している。小さい頃にどういった成り行きで私とは違う「物」の存在というものを理解するに至ったのか、そんなこと具体的に覚えているだろうか？あるいはそのプロセスを自覚的に経験した上で「存在」というものを把握しているだろうか？

もちろんいろいろな説明はできよう。しかし実際にどうなのか、という確定などできるのだろうか？

「理性」に意見をたださなくても、つまり、われわれの考えを哲学上の原理によって考えめぐらしたりしなくても、別個の持続的な存在を対象に帰属させることができる、ということである。実際、哲学者たちが、心から独立な対象についての信念

を確立するためにどんなに納得のゆく論証を示しうるのだと思ったところで、明らかに、こうした論証を知るのはほんのわずかな人だけであって、子供や農民、それどころか人類の大部分が、ある印象には事物を属させ、ほかの印象にはそれを否定するようになるのは、そうした論証のためではないのである。(ヒューム、97 ページ)

・・・別に私たちは「原理」に基づいて物の存在を信じているわけではない。上記の文章はそのことをよく示している。哲学者がいかにか推論をめぐらそうとも、論理を尽くして論証しようとも、そんな推論や論証などおかまいなしに人々は(当然私も含む)「ある印象には事物を属させ、ほかの印象にはそれを否定するようになる」のである。

繰り返すが、そう思ってしまう「原因」を考えてみても、いろいろ思い付きはするし、正しように思える要因を考えたりもできるのであるが、それでも**原理的・唯一的な結論を導くことなどできない**のである。

余談であるが・・・「存在」というものを認識する人間の脳や体の仕組みから説明できるかもしれない。「人間の脳がそうなっているから」と回答することもできよう。しかしそれでは既に「私」と「物」との存在が前提されてしまっている。循環論法である。科学理論から哲学的問題を説明しようとする人たちはこの循環論法に気づいていない。科学理論はいかにして導かれているであろうか？ 被験者がいて(存在して)、その人の頭の中には脳があって、そして目で被験者の前にある(存在している)物を見ている、その「存在」を前提した上で、様々なデータをとり因果関係を導いているのである。因果関係やら存在を前提として導かれた科学理論で因果関係や存在の根拠を導こうとするのは、繰り返すがまさに循環論法以外の何物でもないのだ。

話はもどるが・・・一方で、「私と物が別個の存在としてある」と確信した上で、その根拠を問われれば、それに対しては(先に説明したとおり)いろいろな答えを考え付くであろう。この「**根拠づけ**」(あるいは客観的「**正しさ**」の追求)と「**原因**」とを混同してはならない。

そこに見えているリンゴが本当に存在しているのか、確かめたければさらに近寄って触ってみるとか、香りを嗅いでみるとか、さらなる経験の積み重ねで確信を強めるであろう。あるいは他の人に尋ねて、その人もリンゴが見えているのか聞くであろう。お化けがいた!と思ったが本当なのか確かめようと思えば、さらに凝視したり、近づいて別のものと見間違えてはいないかと再検証しようとするであろう。

Ⅲ. 「原理」ではなく個別的な因果的知識の集積

(1) 「整合性」は過去の経験に基づく因果的知識

ヒュームは持続的存在に関して「恒常性」とともに「整合性」(ヒューム、98 ページ他)を強調している。(恒常性については、ヒューム『人性論』分析:「同一性」について http://miya.aki.gs/miya/miya_report29.pdf で詳細に説明している)

物体はしばしばその位置と性質を変え、ときには、しばらく見えなかったあとで、つまり知覚が中断したあとで、それと見分けられぬようになることもあるのである。しかし、この場合でも、物体はこのように変化しても整合性を保っていること、すなわち、変化する前と後の状態は互いに規則的に依存し合っていることが認められる。そして、このことが一種の因果性による推論のもとをなして、物体の持続的な存在という所信を生むのである。(ヒューム、98 ページ)

・・・物の配置やら状態が変化していた場合でも、それらが同じ物であると自然に思っている・・・そういう判断を私たちは日常的にしていると思う。その場合における同一性・恒常性を根拠づける、あるいは確かめるのは、やはり過去の経験に基づく因果関係によるものであろう。「整合性」とは過去の経験に基づいた因果関係のことなのである。

私はこの居間でいろいろの火のほうを向いてすわっている。私の感覚機能に入ってくる対象は私のまわりの数ヤード内にある。なるほど、私の記憶は多くの対象の存在について告げる。しかし、記憶が知らせることは、対象が過去に存在したということ以上には及ばない。感覚機能も記憶も、それらの存在の持続についてはなんらの証拠も与えない。そういうわけで、私がこうすわってこうした考えを思いめぐらしているとき、急にドアがちょうつがいのところを回転するような音を聞き、やがて玄関番が私のほうへ歩み寄って来るのを見るとする。(ヒューム、99 ページ)

・・・ただ、私は自分が住んでいる家の様々な場所に何度も行っているし、その部屋が常に同じ場所にあることを経験(の繰り返し)から知っている。これまで自分の住む家が持続して存在してきたことを、いろいろ“考えを思いめぐら”せなくても知っている。知覚経験の恒常的相伴をとともなう因果的知識には、強い確信を持つことができる、そう(事後的に)説明することも可能ではあろう(後述するように話はそれだけではないのだが)。

このことは、あらためて多くのことを反省し、推論するきっかけを与えるだろう。第一に、私はこれまでこんな音がドアの動き以外のなにかから発しうるのを観察したことがない。そこで、現在の現象が過去のすべての経験と矛盾しないためには、居間のもう一方の側にあると記憶しているドアがやはり今も存在していなければならぬ、と断定する。さらにまた、私がこれまで知っている限りでは、いつも人間の身体は重力と呼ばれる性質を持っていて、この性質のために空中に舞い上がらぬようになっていた。しかし、もし私が覚えている階段が私の見ていないうちになくなっているのなら、この玄関番は私の居間に来るためには空中に舞い上がらねばならなかったに違いない。(ヒューム、99～100 ページ)

・・・これらも自らの経験に基づいた経験則、因果的知識によるものである。

しかし、繰り返すが、私たちは日常的にいちいちこんなことを考えながら生活しているであろうか？ それこそヒューム自身が先に触れた、

哲学者たちが、心から独立な対象についての信念を確立するためにどんなに納得のゆく論証を示しうるのだと思ったところで、明らかに、こうした論証を知るのはほんのわずかな人だけであって、子供や農民、それどころか人類の大部分が、ある印象には事物を属させ、ほかの印象にはそれを否定するようになるのは、そうした論証のためではないのである。(ヒューム、97 ページ)

・・・という“哲学者”による論証ではないだろうか？ ただ言えることは、特別な出来事なしには（業者によって取り壊されたとか、現在リフォーム中だとかいったような）、家の間取りが勝手に変化するようなことはない、私たちはそれを知っているということである。

上記のような恒常性を、改めて根拠づけようとすれば、その時初めて上記のヒュームのような説明をすることはできる。いろいろな知識をもって状況を説明するであろう。

それでも、究極的にそれら推論の「正しさ」を確かめたければ、自分から玄関に出向いてみれば良い。間取りは変わっていないはずである。

(2) 因果推論に恒常的相伴は必ずしも必要ではない

では、自らが知覚したわけではない因果的知識、他者から教えてもらったり、様々なメディアから取得した知識などについてはどう説明すれば良いであろうか？

しかし、これが全部ではない。私は手紙を受け取り、それを開いて、筆跡や署名か

らそれが二百リーグ隔たっているという友人から届いたことを知る。この現象をほかの実例での私の経験と合致するよう説明できるためには、記憶と観察に従って、私と友人との間にある海と陸地の全体を心のなかに広げ、郵便馬車や渡し船の働きと持続的な存在とを想定しなければならない。この玄関番と手紙の現象は、ある見方から考えると、普通の経験と矛盾し、したがって、因果の結合に関して作られている基本原則に反対するとみなされよう。というのは、私はそのような音を聞くのと同時にそのような事物が動くのを見るのに慣れてきた。ところが、いまの特殊な状況では、これら二つの知覚の両方を受け取ったのではないのである。そこで、ドアが今も以前のままにあり、知覚はしなかったが、そのドアが開いたのだと想定しなければ、これまでの観察と今の観察とは相反することになる。この想定は、初めはまったく意識的になされ、仮説的なものであるが、この想定だけがそうした矛盾を調整しうるものであるために、やがて勢いと明証性とを得るようになる。(ヒューム、100 ページ)

・・・過去の経験においてドアを開ける動作とドアから聞こえてくる音との因果関係が認められたのである。その上で、その因果関係に基づいてドアの音からドアが開く状況を因果推論しているだけであって、このことは別に“基本原則”に反対してはいないのではないか。

また、因果的事実認識・因果的知識は自らの知覚のみではなく、他者や様々なメディアからの情報によってももたらされるものもある。上記の例でいえば、(おそらく)行ったことのない陸地や海、あるいは郵便制度にかかわる人々や設備などであろうか。ヒューム自身がシーザー暗殺の事例を挙げて説明している。「最後には見分けのきく段階をたどって事件の現場証人、目撃者にいきつく」(ヒューム、50 ページ)、つまり「記憶か感覚機能かどちらかのよりどころ」(ヒューム、50 ページ)、誰かの知覚経験(印象)に辿れるということが、その知識の「正しさ」を担保するものとなる(もちろん絶対的真理ではない。新たな文献などの発見により覆される可能性もあるのだが)。

ただ、これは私自身の知覚の恒常的相伴によるものではない。このことは“基本原則”に反対しているということになるかもしれないが・・・果たして因果推論は自らの知覚の恒常的相伴を伴わなければならないものであろうか？

・・・知覚経験の恒常的相伴は、因果関係の客観的「正しさ」(私にとっても他の人にとっても常にそのようになるということ)を確信させるに十分な証拠となる(もちろん絶対的真理ではないが)。しかし、私(あるいは誰か)個人個人が因果関係に対し確信を持つために別に恒常的相伴が必要なわけではない。

ヒューム自身がこう述べている。

臆病で、すぐに恐れをいだきやすい人は、出会う危険についての説明を聞くといつ

も、簡単にそれに従ってしまう。また、悲しみがちな、ふさぎこむ気質の人は、心を占めている情念を助長するものはすべて、すぐに軽々しく信じがちである。なにか心を動かす対象が現れると、それが警告を与えて、その対象に固有なかなりの情念をすぐに呼び起こす。生まれつき、その情念に傾きやすい人において、そうである。(ヒューム、77 ページ)

・・・因果関係も同様である。強烈な出来事であれば一度きりの経験で因果関係を信じ込んでしまうかもしれない。あるいは非常に信頼している人からの情報であれば、(よっぽど突拍子もない見解でなければ)自らが経験していなくてもその情報を信じてしまう可能性が高いであろう。

私たちの確信・信念の“原因”など(存在への信念も同様)、一律に、単一の原理として説明できるようなものではないのだ。とにかく私たちは存在の恒常性を(それを阻害する可能性のある出来事なしには)確信しているのである。その根拠をあえて問われれば、様々な因果的知識を引き合いに出し「整合的に」説明しようと試みるであろう。

そして、それが本当に正しいのかどうか確かめるための究極的な方法は、やはり実物の観察なのである。

しかし、実際のところは多くの事柄をいちいち確かめもせずに信じながら生活している。生活に支障のない限りそんなこと気にせずやり過ごしているのである。繰り返すが、私たちはヒュームの言うような“基本原則”など気にせず、様々な因果的知識を信用しながら生活している。

現れ方の整合性をもとにしたこのような断定は、習慣に起因し、過去の経験によって規制される点から見て、原因と結果に関する推論と同じ性質のものと思えるかもしれないが、しかし、調べればわかるように、実際はかなり違っていて、整合性からの推理は知覚から起こり、習慣からは間接的な、回り遠いやり方で起こるのである。なぜなら、すぐに認められることと思うが、この場合には、心自身の知覚のほかはなにも実際に心に現れないのだから、いかなる習慣もこれらの知覚の規則的な契機による以外の方法で得られるのは不可能であるし、なおまた、いかなる習慣も知覚の持つ規則性の程度を越えるのは不可能である。(ヒューム、100~101 ページ)

・・・因果関係への確信が習慣(恒常的相伴)によるとは限らないことは既に述べた。それが知覚として現れないものを因果推論する場合においてはなおさらである。

事実に関する推論はすべて習慣からだけ起こるのであり、その習慣はくり返された知覚の結果以外のものではあり得ないのだから、そこで、いまのように習慣と推論

とが知覚を越えて広がるのは、たえざるくり返しと結合からの直接で、自然な結果なのではなくて、別のある原理の共同作用から起こるのでなければならない。(ヒューム、101 ページ)

・・・これも因果関係に関する誤解からきている見解である。推論するのに恒常的相伴は関係ない。恒常的相伴に基づいていない推論をあえてすることも可能なのである。そしてその推論の「正しさ」を確かめる方法は、結局のところ、実際に現場を見てみる、実際に試してみる、そういった具体的経験しかないのである。

「雲が立ち込めてきたから雨がふるかも」という因果推論の正しさは、過去の経験の恒常的相伴により確かめられるのではなく、実際にこれから雨が降るかどうかで確かめられるのだ。

ヒュームは「感覚機能」「理性」による説明を否定し、結論として「想像」が存在についての所信をもたらずのものであるとしている。全く的外れな結論であるとも言えないが、ヒュームの「想像」そして「因果関係」に関する誤解が説明を不正確にしているように思われる。

ヒュームは恒常的相伴により因果関係が導かれる、といったふうな“因果的”説明をしまっている(因果関係で因果関係を説明しようとしている)。それゆえに恒常的相伴を伴わない因果推論を“想像”としてしまっているのである。

想像という言葉にはいろいろなニュアンスがある。ある事象から連想する何かを思い浮かべたり、(知る限りでは)何の脈絡もない何かを突然思い浮かべたりとか・・・あるいは、これから現時点の状態や様々な要因を因果的につなぎ合わせ将来の状況を予想する、あるいはある出来事がもし起こったら私の生活はどう変わるのか考えてみたり、そういった因果推論も、実現性がそれほど高くなさそうなものに関しては想像と呼ぶかもしれない。

あるいは隣の部屋で物音がした時、それが何の音なのか、自分の知っている情報を頼りに推理してみること、これも想像と呼べるかもしれない。しかしこれも因果推論であることに変わりはない。

ヒュームは因果関係と経験との関係とを見誤っているために、因果関係が引き起こされる「原因」を問うてしまったために、ここで不正確な説明をしてしまったのである。

(3) 「原理」ではなく個別的な因果的知識の集積

感覚機能にそのまま信頼を置くよりも、感覚機能をといてよりむしろ想像をまったく信頼しないような気になっている。想像のあのとるに足らぬ性質が、しかもあの

ような誤った想定に導かれて、いかにしてなんらかの強固な、理にかなった体系に至りうるのか、思いいだくことができないのである。

これまでに述べてきた理性および感覚機能についての懐疑論的な疑いは、けっして根本的には癒され得ない病いである。(ヒューム、107 ページ)

・・・拙著(ヒューム『人性論』分析:「同一性」について)で既に説明したのであるが、ヒュームは同一性も「知覚」である(つまり論証により根拠づけるものではない)と説明しているにもかかわらず、一方で「万物は流転する」のような哲学的常識に縛られ、印象は常に変化・消失し、同じものは現れないという"思い込み"を取り払えないまま同一性について説明しようとして袋小路に入り込んでしまっている。

しかし、私たちが「同じだ」と思うのは、ただ"端的に"そう思うのであって、「違う」「変化した」と"端的に"思うのと同じことなのである。ヒュームは差異・変化は端的に受け取り疑わないにもかかわらず、同一性・不変性に対してのみ懐疑を向けているのである。

これがまさに「誤った想定」なのであって、この思い込みが、ヒュームの言う「病」というものを引き起こしているのである。同一性は錯覚でも何でもない。

私たちは自らの五感を頼りに生活している。通常は錯覚することはない。ただ、見間違える経験やら錯覚に関する実験・研究により、私たちが錯覚しうる状況・条件などを知識として知っている。

そして、それでも時折見間違えたり聞き間違えたりして失敗しながら、私たちが間違える条件というものを因果的知識として蓄積していくのである。

そういった因果的知識の集積が「整合性」というものの根拠になっている。それらは「習慣」とかいった一律な“原理”によってもたらされるものではなく、あくまで個別的な因果的知識の集積、簡単に言えば“いろいろな知識”であるにすぎない。

とにもかくにも、「存在」というものの“原因”を一元的に説明することなどできないし(いろいろな説明は可能であるが)、何らかの「原理」というものを探する必要もないのである。

あるいは・・・一元的な、単一の原理から説明できないということから、ヒュームは「想像」という表現を使わざるをえなかった、そう受け取ることもできるかもしれない。